

---

# ホラ吹き甦らず

ニトログリセリン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホラ吹き甦らず

### 【Nコード】

N34760

### 【作者名】

ニトログリセリン

### 【あらすじ】

町一番のホラ吹きとの思い出。

「コウちゃんはなあ、パイプン股から生まれてきたんやでえ」

チタばあちゃんの発言で一番印象に残っているものと聞かれれば、  
先ずこれが頭に浮かぶ。

ぼくの生まれた町は、じっちゃんが生まれるくらいから工場地帯  
だっただけ。

塀に囲まれた広大な敷地内には黒い汚れのこびりついた建物づた  
いに、大きなパイプがうんとたくさんあった。

股のあるパイプもだ。

からからに干からびた細い指が、煙の上がる灰色の群へ向けられ  
る。

チタばあちゃんは嘘つきだ。

それも、ぼくの住む町で一番のホラ吹きだ。

だからとっちゃんもじっちゃんも、みんなもみんな、チタばあち  
やんの言うことを信じない。

もちろんそのとき、ぼくもチタばあちゃんの言葉は信じなかった  
んだけど、あのパイプのぐねぐねを見ると、なるほど、これ  
だけあれば一つくらい人を生むパイプがあるかも知れないと、ぼく  
はひそかに思うのだ。

「ぼくはどれから生まれたの？」

そう尋ねたのはただの興味だった。

けれどチタばあちゃんとぼくの間に、作業着を着たとつちゃんが駆け込んできた。

息の荒いまま、とつちゃんはぼくに背を向けチタばあちゃんを怒鳴りつける。

「縁起でもない嘘をつくな！ ホラ吹きババア！」

しかしそんなことで怯むホラ吹きババアじゃない。  
とつちゃんに負けない声でチタばあちゃんがなる。

「本当のことだよ！」

「くたばれクソババア」

そのままとつちゃんに手を引かれたぼくは、とつちゃんにチタばあちゃんに近付くなつて散々怒られた。

ホラ吹きがうつちまうととつちゃんはもっともらしく言ってたけど、理由はそれじゃないって僕は思ってた。

素直に返事をしない僕に業を煮やしたとつちゃんは、学校以外家から出してくれなくなった。

そうこうしてるうちに、チタばあちゃんは亡くなったんだった。  
最後に会って一週間も経たない、夏の暑い日のことだった。

葬儀は早かったと思う。

嘘つきのホラ吹きだったけどどこか憎めないチタばあちゃんは、町中の人から花をもらった。棺桶に収まった身体のほとんどが花で埋まる。

真っ黒な服は窮屈だ。

ましてやじつとしてなきやいけないなんて最悪だ。

ぼくも、みんなも、蓋のされた箱を見ている。棺桶がゆっくりと霊柩車へ運ばれていく。

いよいよ車に乗せようという時だ。

蓋がぱかっと開いて、死装束のチタばあちゃんが起き上がる。

町の人々が集まった会場を見回し、いたずらが成功した子供みたいに二ツと笑う。

「まだ死んどらんがな」

葬式会場中が唖然となつて、一度引いた潮が浜へ押し返されてくるみたいにホラ吹きババアと騒ぎ出した。

みんなが頭を掻いたりもじもじして、隣の人と目を合わせる。

まんまと騙されちまつたな。

ホラ吹きババアめ、泣いて損したよ。

……なんてことにはならなかった。

チタばあちゃんは真っ白な顔で口を半開いたまま一回も喋りはしなかった。

静かに霊柩車へうつされ、そのまま連れてかれた。

だから、あの時間きそびれた答えは聞けずじまいだ。

八年ぶりに会う同級生たちはみんな大人びて見えた。

小学校を出て以来のやつ。中学校まで一緒だったやつ。高校で県外へ出てったままだったやつ。

久しぶり過ぎたし、記憶の中よりぐんと成長してて一体誰が誰だかわかんない。

名前を言われてやっとわかったやつもいたけど、名前を聞かされても、いまいちぴんとこないやつもいた。

思い出せずにいても、

「お前、相変わらずだなあ」

って背中を叩かれながら言われるだけなんだから、僕はもともとからそうなんだろう。

よくぼーつとしてるとか言われてたし。

成り行きで行くことになった同窓会ではちびちびとアルコールを舐めながら、何となく名前を知っている女子の隣で胡座を掻いてた。チタばあちゃんの話題が上がったのは、小学校のとき色々馬鹿やっつけたススキがまた馬鹿やってテーブルからずり落ちたくらいのときだ。

「チタばあちゃんっていたじゃない」

がやがやとどんちゃん騒ぎの傍らで、耳に拾った固有名詞で僕はチタばあちゃんのついた猛烈な嘘を思い出したんだった。

かつての同級生たちは口笛でウグイスの鳴き真似をされて騙されたとか、落ち葉の焼きあとを指差して焼き芋が入っていると騙されたとか、些細な嘘を語りあっている。

しゃがれ声と、工場へ伸ばされた指の情景が脳裏を過る。

僕には母がいない。

生物学上の母は地球のどこかにいるんだろうけど、一番最初の思い出を探っても、生活の中に大人の女性の影はなかった。ずっと祖父と父と僕の三人暮らしだ。

端から見れば母のいない僕にチタばあちゃんがついた嘘はひどいもんだろう。

あのとき激怒した父の気持ちもよくわかる。

しかし公園の砂場で一人遊んでいた僕を、チタばあちゃんはからかいたかったわけではないんじゃないだろうか。

あの工場は昔も今も町の象徴で、生活の場だった。

パイプが入り乱れて、煙突の先から白い煙を幾つも空へ伸ばしている。

僕が、母がいなくて寂しかったことを、チタばあちゃんは知っていたのだろう。

嘘をつくことで、不器用ながら僕も町の子供の一人なんだから、寂しがる必要はないんだって言おうとしてたんだと思う。

下手な慰めよりも嘘を選んだ優しさは、残念なことに誰にも伝わらなかったんだけれど。

なんちゃって。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3476o/>

---

ホラ吹き甦らず

2011年10月5日19時46分発行